

1. 考古学入門

1. 考古学ってなに？

考古学とは、文字どおり「古いものごとを考える学問」のことです。日本にはもともとこの学問はありませんでしたが、明治時代に西洋からもたらされた「Archaeology（アーケオロジー）」という学問の日本語訳として「考古学」の名が用いられるようになりました。では、考古学とは具体的にどのようなことを研究する学問なのでしょうか？

考古学とは、人類が過去に残したモノを研究し、それぞれの時代の人々の生活や文化を明らかにする学問のことです。人類が残したモノとは、「遺跡」、「遺構」、「遺物」のことをさします。「遺跡」とは、都市跡や集落跡、寺院跡、古墳、工房跡、市場跡、道路跡、橋跡、水田跡など人類が残した生活の痕跡のすべてをいいます。

「遺構」とは、その遺跡を構成する施設のことです。集落などの遺跡の場合は建物跡や住居跡、井戸、溝など、古墳の場合は石室や濠などのことをいいます。

「遺物」とは、人類が作り、そして用いた石器、土器、木器、骨角器、金属器などの道具のことをいいます。



遺跡

六条山遺跡（奈良市）



遺構

住居あとの調査風景

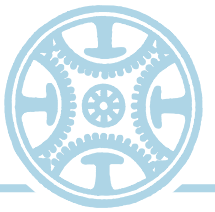


遺物

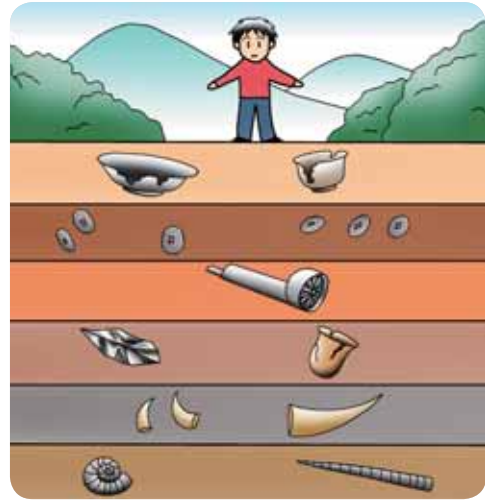
六条山遺跡から出土した弥生土器

2. どうして古い時代のものが土に埋まっているの？

考古学で調査し、研究する「遺跡」、「遺構」、「遺物」は、古墳などのように現在も地表で見ることが出来るものもありますが、多くは発掘調査で地面の下から発見されます。では、どうして古い時代のものが地面の下に埋まっているのでしょうか？



土は、洪水によって流されてきた土砂や自然に降りつもる砂ぼこり、人工的に盛られた整地などによって、基本的には上に上にと順に積もっていきます。そのために「遺跡」や「遺物」は土に埋まっていることが多いのです。このように積もった土を「土層」といいます。土層は上に順に積もっていきますので、上にある土層ほど新しく、下にある土層ほど古いということになります。



地層のようす

ですから、それぞれの土層にある「遺跡」や「遺物」は基本的には上にあるほどより新しい時代のもの、下にあるほどより古い時代のものであるといえます。ただ、土層は場所や土の種類などによって積もっていく厚さが違いますので、地面から浅ければ新しい時代のもの、深ければ古い時代のものと、単純に決められるものではありません。同じ場所で発掘調査をおこなった時に、土層の上下の関係から新しいか古いかを判断することができるのです。

このように土層の上下の位置から年代などを研究する方法を「層位学」といいます。

3. どうして土器などの時代がわかるの？

石器や土器など遺跡から出土するものは、時代によって遺物の種類や形がちがいます。そして、それぞれの時代の遺物も時期によって少しずつ形が変化したりします。こうした時代や時期による形の変化を研究する方法を「型式学」といいます。ただし、形の変化だけでは、どちらが古くて、どちらが新しいとははっきり言うことができないこともあります。そこで、先に説明した「層位学」を利用して、どちらが古く、どちらが新しいのかを推定し、遺物を年代の順にならべて考えることができるようになります。遺物にその具体的な年代を記したものが見つければ、もっとくわしく年代を推定することができます。このようにモノの年代を順番に並べて研究する方法を「編年」といいます。



古墳時代中期の須恵器
(寺口忍海古墳群・葛城市)



古墳時代後期の須恵器
(牧野古墳・広陵町)



奈良時代の土器と須恵器
(平城京左京六条二坊・奈良市)

【奈良県のおもな遺跡年表】（※印のある遺跡はこの本の中に出てきます。）

時代		おもな遺跡	おもな出来事
旧石器時代		峯ノ阪遺跡下層（石核・削器） 桜ヶ丘第1地点遺跡（ナイフ形石器） 峯ノ阪遺跡上層（小型ナイフ形石器）	氷河期 日本列島が大陸から切り離される
縄文時代		桐山和田遺跡（隆起線文土器、尖頭器）※ 大川遺跡（尖底深鉢形土器）※ 大淀桜ヶ丘遺跡（爪形文土器） 布留遺跡（石棒） 広瀬遺跡（縄文土器、住居跡）※ 宮滝遺跡（縄文土器、石斧） 樺原遺跡（土偶）※ 竹内遺跡（土坑墓、配石）※	土器がつくられるようになる 弓矢がつくられるようになる 集落がつくられるようになる
弥生時代		唐古・鍵遺跡（弥生土器、銅鐸鑄型）※ 坪井・大福遺跡（方形周溝墓）※ 中曾司遺跡 清水風遺跡（絵文土器）※ 新沢一遺跡（弥生土器）※ 六条山遺跡（弥生土器）※	米づくりがはじまる 金属器がつくられるようになる 57年 倭の奴の王が漢に使いを送る 高地性集落がつくられるようになる
古墳時代	前期	纏向遺跡（土師器）※ 纏向石塚古墳（弧文円板）※ 箸墓古墳※ メスリ山古墳（大型円筒埴輪）※ 黒塚古墳※	239年 卑弥呼が魏に使いを送る 古墳がつくられるようになる
	中期	宮山古墳（家形埴輪）※ 四条古墳（形象埴輪）※ 新沢千塚古墳群※ 南郷遺跡群	391年 倭が朝鮮半島に出兵する 群集墳がつくられるようになる
	後期	藤ノ木古墳（金銅製馬具、装身具）※ 石舞台古墳※	
飛鳥・奈良時代	飛鳥	飛鳥寺（瓦）※ 飛鳥京跡（木簡、宮殿跡）※ 高松塚古墳（壁画）※ 藤原京跡（木簡、土師器、須恵器）※ 平城京跡（木簡、土師器、須恵器）※ 東大寺（瓦、鑄造関連遺物）※ 太安萬侶墓（墓誌）※	645年 大化の改新 694年 藤原京に都を移す 710年 平城京に都を移す 752年 東大寺大仏の開眼供養
	奈良		

6. この博物館ではどのようなものを展示しているの？

当博物館では、おもに奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をして、出土した遺物を展示しています。つまり、ほとんどが遺跡から出てきた本物です。では、発掘調査がどのようにおこなわれ、出土した遺物が博物館に展示されるようになるのでしょうか？

ここでは、発掘調査から展示まで、どのような作業がおこなわれているのか、簡単に見てみましょう。

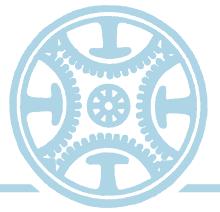
<発掘調査>

奈良県には12,000か所以上の遺跡があります。これらの遺跡の範囲の中で道路を造ったり、住宅や工場を建てたりする時には、その前に地面の下に遺跡が埋まっていないかを調べるために発掘調査をおこないます。

1. 発掘調査は、最初だけはパワーショベルで昔の地面まで掘り下げます。「機械掘削」といいます。発掘調査では、この後はほとんど人力で掘る作業などをおこないます。
2. つぎに「遺構検出」という作業をします。柱の穴や井戸、溝などは地面を掘ってつくられますから、それらが埋まる時はまわりの地面とは少しちがう土が入ります。昔の地面をていねいに観察して、土の色や固さ、種類がちがう部分、つまり「遺構」を見つけるのです。
3. 遺構が見つかったら、つぎに埋まった土を手で掘っていきます。これを「遺構掘削」といいます。地面と色や固さなどがちがう土をていねいに掘り出してやると、遺構のかたちが明らかになります。遺構の中からは、土器などの遺物がたくさん出土することもあります。
4. こうして検出し、掘削した遺構や、遺物が出土した様子、土層が堆積した様子は、すべて正確に寸法を測って図面をつくります。これを「遺構実測」といいます。また、遺構や遺物の出土した様子、土層の堆積した様子はすべて写真を撮影して記録します。



発掘調査のようす（曽我遺跡・橿原市）



＜整理作業＞

1. 発掘調査で出てきたいろいろな遺物は、まずブラシやハケでいねいに水洗いをします。
2. つぎに「ネーミング」という作業をします。これは遺物ひとつひとつに、どこの遺跡のどこから出土したかを記入する作業です。
3. 土器などの遺物は、完全な形で出土することもあります。多くは割れて破片になっています。これをジグソーパズルのように接着剤でくっつけていき、破片が足りない部分には石こうなどを入れて、復元します。
4. 遺物は復元するだけでなく、ひとつずつ寸法を測って、その遺物の特徴がわかるように図面をつくります。これを「遺物実測」といいます。また、写真撮影もおこないます。

＜報告書の刊行＞

発掘調査でわかったことや、出土した遺物の整理作業でわかったこと、そして遺跡や遺物について研究してわかったことをまとめて、「概報」や「報告書」という本をつくり、出版します。報告書には発掘調査でつくった遺構や遺物が出土した様子を記録した図面や写真、整理作業で復元した遺物の図面や写真をのせて、これらがどのようなものなのかを調べた結果や、これらのことからどのようなことがわかるのかを研究した結果をのせています。

＜博物館での展示＞

こうして発掘調査で出土した遺物は、調査をおこなった奈良県立橿原考古学研究所と当博物館で保管しています。そしてその中から選んだ遺物を常設展示「大和の考古学」として展示しています。また、発掘成果をより早く公開するための速報展「大和を掘る」も毎年夏におこなっています。



洗浄作業のようす（曽我遺跡・橿原市）